

# 日本の森林資源と木材工業の現状

北海道東海大学教授 布 村 昭 夫

## 森林資源

日本の森林面積は、おおよそスウェーデンと同じ2,500万haであり、このうち40%は人工造林地で占められております。これは約30年前から森林生産力を高めるため、人工造林を積極的に行ったことによるもので、人工造林樹種は本州地方ではスギ、ヒノキであり、北海道ではトドマツ、エゾマツ、ガラマツであります。一方、天然林で生産される広葉樹は大径木が減少してきております。北海道は日本の広葉樹の宝庫と伝われ、ナラ、カバ、ニレ、イタヤをはじめ、多くの種類の広葉樹が蓄積しており、これらを原料とした合板、床板、集成材など木質材料が作られ、建築造作材、家具等に使用されております。日本の木材需要は、1億1,000万 $m^3$ の需要に対し、 $\frac{1}{3}$ しか国産材では供給されず、 $\frac{2}{3}$ は丸太、製材、パルプ、合板製品として輸入しております。

## 製材工業

木材工業の基幹産業であり、その製品の約80%は建築に使われるため、今日的好調な住宅産業に支えられていますが、米材を中心とした製品輸入の増大と国産材の価格維持の問題に迫られております。

また、将来の建築労力の不足を補う多品種の在来工法用建築部材のプレカット化、メカトロ機械による高次加工、高付加価値化など経営の転換を迫られる新たな技術問題を持っております。

## 合板工業

長い間、北海道産広葉樹単板を用いた化粧合板が対米輸出されましたが、韓国、台湾からの低コスト化粧合板に入れ代わり輸出が激減しました。また、合板用ラワン丸太の入手が困難となったため、合板製品を輸入しており、日本は合板の輸出国から輸入国に変化しつつあります。

## 集成材工業

日本の伝統的な建築に必要な高級造作材を生産

するための造作用集成材の生産が中心でありましたが、次第に寸度安定性、構造耐力、防災性などが認められたため、構造用集成材が多く作られるようになりました。特に1987年に建築基準法の中に大断面集成材の使用が認められたため、生産、輸入が急増しております。

## 紙、パルプ工業

紙、板紙の使用量増加によって、生産量(22.5 $\times 10^6$ t)は世界の10%、パルプは6%に達しております。紙、板紙の原料は木材、チップ40%、さらにパルプ製品を20%輸入しております。近年、OA機器用の紙の消費が増加しております。

## フローリング工業

木質への志向が高まるにつれ、一般住宅での合板ベースの化粧加工複合フローリングの使用が増加しました。耐摩耗性、耐久性、弾力性に優れている単層フローリングは学校、体育館などで使われております。

## パーティクルボード工業

均質な面材の特長を生かして家具に使われる比率が最も高くなっております。また、遮音性、音響性から建築やキャビネットに多く使われております。原料の70%は外材であり、国内の建築廃材、工場廃材などの利用が増えています。

## ファイバーボード工業

薄くて強度が高い硬質繊維板(hard board)は打抜加工されて自動車の内装下地材、テレビ裏側の穴あき板などに使用されております。断熱、防音、防湿、軽量の軟質繊維板(soft board)は、屋根、天井材、畳下地材等に使われております。

## 家具工業

生産額は全国で1.5兆円、旭川は北海道の60%のシェアを占め、318億円であります。

(文責 森泉)